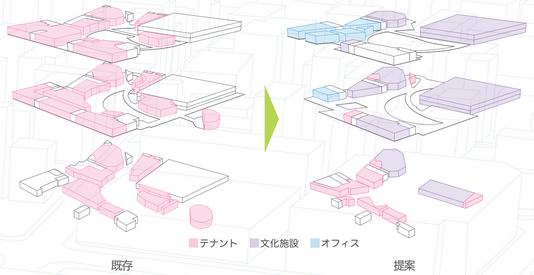
# 駅前から巻き起こる街のリノベーション

金山総合駅が完成してから約半世紀。当時開発された建物群には、更新の時期が迫られている。
そんな中で、アスナル金山は 2028 年に閉館することが決定した。
そこで私たちは、アスナル金山をリノベーションによって新しい姿で残し、
これからの金山のまちの更新のモデルとしていくことを提案する。

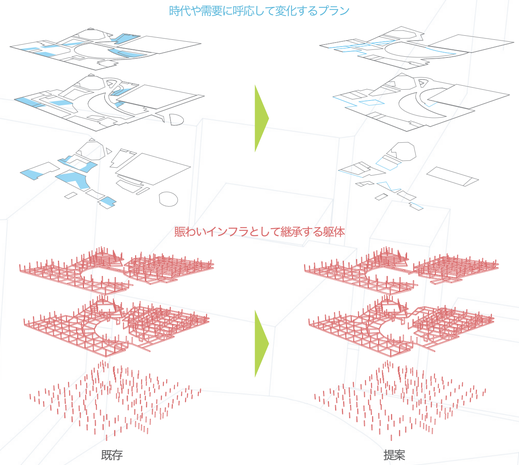
## アスナル金山を再構成する

現状のアスナル金山は、敷地いっぱいにテナントを詰め込んだような商業施設で、駅前でありながら、街の人が集い、憩う場所はほとんどない。そこで私たちは減築をしつつ、テナント以外に文化施設、オフィスという 2 つの要素を取り入れることで、新しい金山の顔となる施設を考えた。



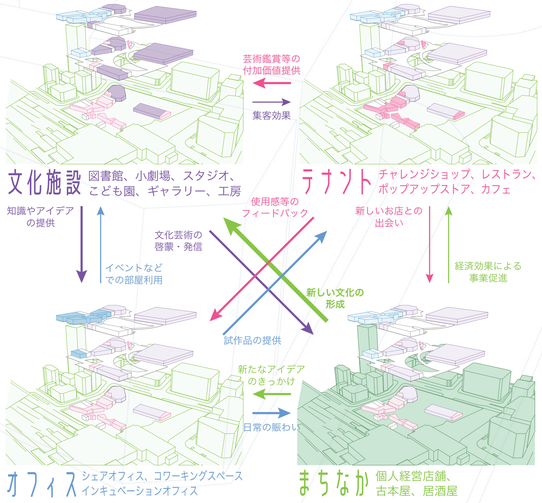

## リノベーションで残していく金山の歴史

アスナル金山を設計した北山孝雄氏は、この施設が「賑わいのインフラストラクチャー」となることを目指した。そんな想いが込められた建物を完全に取り壊すことなく既存躯体を活用していくことで、この土地は自己修復を続け、再開発などに晒されることなく、金山をより良くしようと考えてきた人々の意思とその結晶を継承していくことができる。




## 複合することで生まれる新しい金山の文化

アスナル金山にテナントだけでなく、文化施設、オフィスを付加することで、それぞれの要素に複雑な関係性が生まれる。新しい出会いが幾度となく起こり、新しい何かを創造し、実践していく場として使われることで、新しい文化の形成が促進され、名古屋や、栄にはない金山だけの文化が育まれていく。






シェアオフィスやコワーキングスペースををつなぐ二層の吹き抜け。建て詰まっている既存建物からスラブを引き算する。



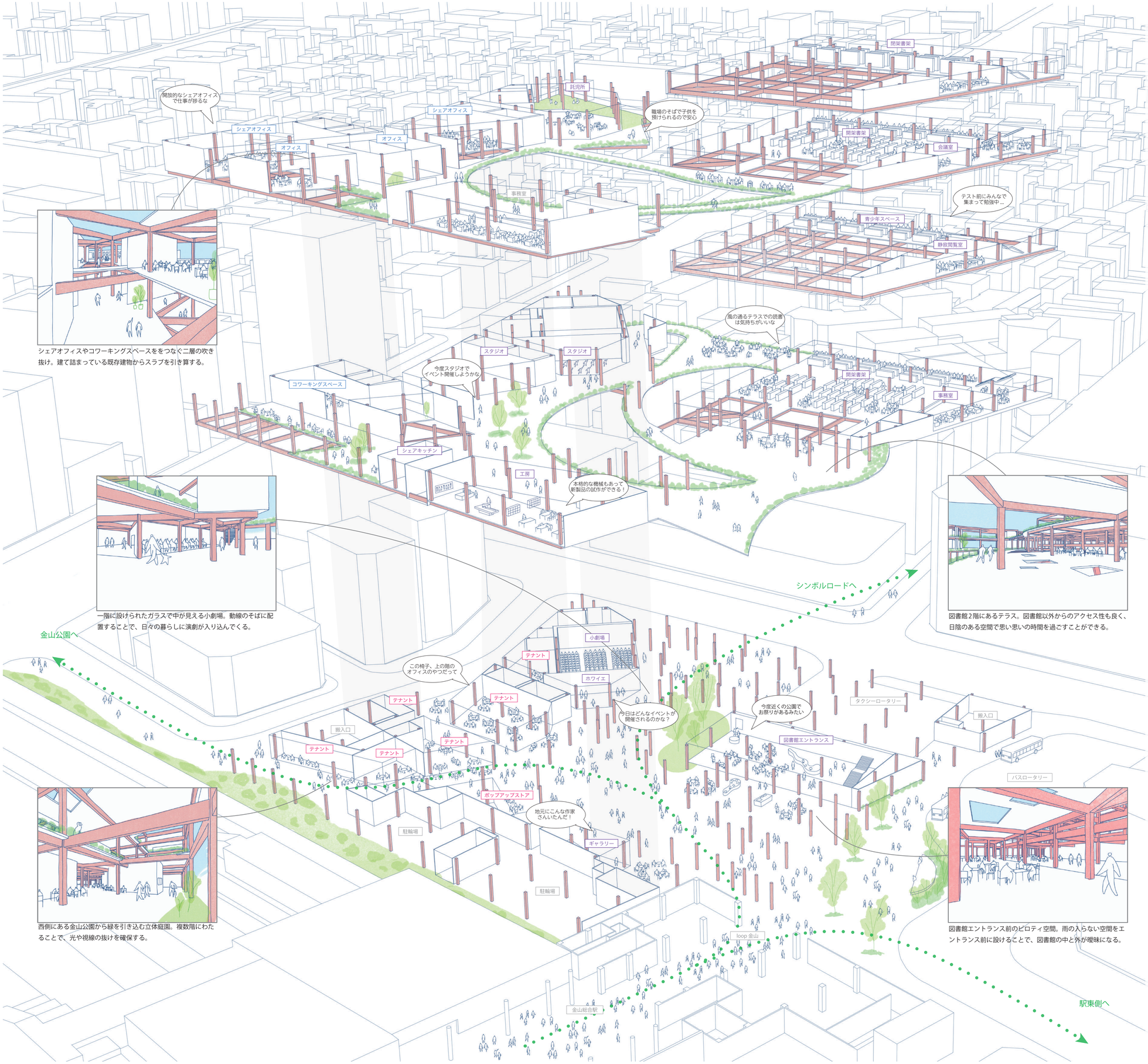
一階に設けられたガラスで中が見える小劇場。動線のそばに配置することで、日々の暮らしに演劇が入り込んでくる。



図書館2階にあるテラス。図書館以外からのアクセス性も良く、日陰のある空間で思い思いの時間を過ごすことができる。



西側にある金山公園から緑を引き込む立体庭園。複数階にわたることで、光や視線の抜けを確保する。



図書館エントランス前のピロティ空間。雨の入らない空間をエントランス前に設けることで、図書館の中と外が曖昧になる。